# 実社会と法学部

講演を行う磯野恭子氏

## 仕事と人生～生きること・くらすこと～

文・写真 磯野恭子（Isono, Yasuko）
山口放送㈱取締役テレビ制作局長

### 夾竹桃（きょうちくとう）の咲く広島で

広島大学のこの広いキャンパスに伺いました。全国一の敷地と人数を誇るそうですね。

その昔、私たちが暮らした広島大学は太田川の臭いのする、チンチン電車が走る千田町に各々の学部が肩を寄せ合って集まっていました。校舎はオンボロでも戦後のバイタリティと学問への自由を共有する思いは学生も教授陣も横溢していたように思います。

昭和二十年八月六日。軍都広島は原子爆弾によって破壊され、二十万人余の屍を乗り越えて広島大学は共学の総合大学としてスタートを切りました。私はこう思います。それぞれの故郷には故郷を代表する花がありますが、広島の花は、あの瓦礫（がれき）に咲いた夏の花、夾竹桃が故郷の花に思えてなりません。

私たち高校生も建物を焼失し、元陸軍被服廠跡が仮校舎でした。七十五年間草木も生えないといわれた広島で真紅な夾竹桃が咲いたのです。それは広島市民にとって、生きようという希望の花でした。

### テレビ局への就職 そしてディレクターに

私は広島大学を卒業するとテレビ局に勤めました。当時次々に開局していくテレビ局、新しい時代を先取りするようなテレビメディアへの熱い思いがトペーパーを配布し、終了後、すぐに感想を書かせて提出させることにした。講演終了直後の質問時間では積極的に発言しない学生も、書かせればなかなか率直な意見を出すものである。コメントペーパーは出席と内容をチェックした後、それぞれの講師の方にお送りした。当初はレポートによる評価を予定していたが、期末試験を実施することに変更し、七回以上の出席者のみ受験を認めた。

### 息をのむ話の展開に 刺激と感銘を受けた

最後にこの授業に対する学生の感想であるが、企画全体についてはおおむね好意的に受け取られている。個々の講師についてはさまざまな評価が寄せられているが、実体験に裏打ちされた現場の話は迫真性があり、私語がぴたりとやんで全員が息をのんで話の展開を待つ、ということもしばしばであった。

何よりも、仕事に対する誇りを持ち、自信をもってそれを語る人物に触れるという体験は、仕事に対する浮わついた気持ちを持ちがちな今様の学生に、強い刺激と感銘を与えたようである。

この授業は平成九年度も講師を入れ替えて継続する予定（将来的には総合科目と位置づけたい）であるが、単位にかかわりなく来年度も続けて聞いてみたいという声が相当数あったことは、この授業が成功であったことを物語っている。

ありましたが、女子学生の就職は厳しかった。男女機会均等法などはなく、記者・ディレクターは男子のみで、僅かに男女ともというのは「アナウンサー」で、私は大分放送と山口放送を受け、広島に近い山口放送に入社を決めました。

入社のとき「本来なら自分が原稿を書き取材し番組をつくりたい」と面接で意思表示をしておきました。そして七年後、ラジオプロデューサー（男子）の欠員でラジオ制作に移り、さらに八年後、テレビのディレクターになりました。昭和四十七年、歳も四十歳を超え、随分遅いディレクターの誕生でした。

聞こえるよ母さんの声が… ～原爆の子、百合子～。取材中の筆者（昭和52年冬）

## 風化させたくない「ヒロシマ」

その頃テレビドキュメンタリーは下火でした。昭和三十年代がドキュメンタリーの黄金期でしたが、四十年代は世論が分裂した時代で高度成長から低成長へと世の中は移り、ベトナム戦争、公害戦争、全共斗闘争と世論は保守、革新と二分して対立します。

昭和五十年代はそんな世論を嫌い国民は泰平な幸福を求めてマイホーム主義や軽薄短小路線に変わっていました。面白くなければテレビではないと言われた時代です。この時代は広島の原爆も沖縄、水俣も世間から忘れられつつあり、広島・長崎の局も原爆番組は作らない。もう原爆でもないだろうという風潮が昭和五十年代でした。

山口は広島の隣で被爆者も三番目に多い県ですが、明治維新を起こした人材を輩出。岸、佐藤と七人の宰相を生んだ中央集権的な色彩が色濃い保守王国で、平和や原爆は遠いのです。そこに暮らしながらも広島を離れて二十余年、私の胸にはあの戦後の夾竹桃の紅の花が焼きついていました。友だちのほとんどは、両親や家族、本人も含めて被爆者でした。家を失い、傷ついた身体をさりげなく隠して戦後を生きたのです。「あのヒロシマ」を風化させてはならない。ヒロシマ・長崎の局がやらなければ山口でという思いが私に突き上げてきました。

## ドキュメンタリー制作に自分の存在理由をさがして

私の本格的なドキュメンタリーの第一作となったのは、昭和五十四年制作の「聞こえるよ母さんの声が～原爆の子　百合子～」です。彼女は母親の胎内で被爆。小頭症として生まれるのですがチエは三歳、岩国基地の側で母の影に隠れて戦後を生きた百合子さんが主人公でした。三十二歳の時、母親は心を残しながら死んでいきます。

墓参りを取材したとき、その映像は圧巻でした。母の墓に耳をつけた百合子さんが何かを聞いて微笑むのです。私たちには決して聞こえない声を原爆の子は確かに聞いたのでしょう。その母の声とは何でしょうか。

報道するものはその映像を弄んではならないと申します。真実の映像をこそ、私たちは取材しなければならない。百合子さんという名もない庶民の目線に降りていった時に、私たちはその人たちの確かな声を聞くことができるのです。ドキュメンタリーは、そこへどうして迫っていけるか、それが勝負です。

日々歴史に流されていく人々の、人知れず流す涙や笑い声や思いを明日へ繋いでいきたい。そのためにこそ私たちテレビジャーナリズムの役割はあるのだと実感しました。

テレビは日々視聴率競争の名のもとにテレビショーを繰り返しています。好奇心を絶えず刺激させて、戦後五十年、日本の消費社会を煽っていきました。物質文明の華を咲かせ豊かさを謳歌し、その影で競争社会、ストレス社会に身を置きながらも、一皮めくれば地球上には飢えと戦争が同居しています。

ヒロシマは、日本が平和への思いと戦争の愚かしさを世界に訴えた戦後スタートの原点です。このことを私は、仕事の上で果たす役割を担っていけたら戦後五十年を生きた存在理由があったのでは、という思いがあります。

仕事と人生は自らが拓き、闘うところからはじまるとも言えましょう。皆さん、頑張って下さい。とくに女性が…。